和泉式部の「桜」の歌について

金子紀子

一　はじめに

本稿は、和泉式部の歌の中から、「桜」を詠んだ歌を抽出し、それぞれを考察するものである。ひとつの具体的な素材によって歌を抽出することは、歌群や題詠、贈答歌、独詠等の作歌の場の枠を越えて、和泉式部の歌全体に接することができる。これらの「桜」を主題とした歌を通して、現在まであまり論じられていない歌を含め、和泉式部の歌の特質、あるいは本質を解明することを目的とする。

「桜」を選んだのは、「桜」が古代から歌材として勅撰集にも私家集にもずっと詠まれ続けている、和歌の伝統の根幹をなす歌材であること、ゆえに「桜」の歌によって和歌史のひとつの面をとらえることができるからである。そして多くの「桜」の歌と比較することができ、和歌史上の和泉式部の位置をも確認できると考える。

和泉式部の歌を、「桜」歌というカテゴリーで取り上げた論考はさほどない。「桜」歌の考究としては、初期百首、あるいは公任の白河山荘での贈答歌、権中納言の屏風歌などの考究のなかで取り上げたものが見られる程度であり、それぞれの歌群の中での考察に留まる。そこで本論文では、和泉式部が「桜」を歌に詠む際に、「桜」をどのように捉え、どんな表現で詠むのか、和泉式部にとって「桜」とは何であるのか、一つの行為「折る」や、桜と心、桜を巡っての連作意識、独詠などから考究して行きたい。

本論文の「桜」歌の範囲であるが、まず第一に詞書と歌のどちらかに「桜」の語が含まれている歌をカテゴリーとして扱う。これらの歌は、「桜」を主題とする歌と、「桜」を介しての人事詠等があり、これらがカテゴリーの主軸になる。また、「花」のうち「桜」の歌であるかについては、詞書の内容、季節（二月・三月）前後の歌、重出歌の詞書、歌の内容、他の歌人の歌集等から判断する。

重出歌についてであるが、和泉式部集の中には多くの重出歌が含まれており、これについては成立や構造上の問題として、先学の諸研究がある。「桜」歌にも重出歌が見られるが、単なる異同では済まされない詞書の違いや、詠歌状況の変化、歌の配列の移動など、明らかに何らかの意図が働いているのではないかと思わせる重出歌が見られる。本論文では、重出歌は別のバージョンとして、その中の創作性なども合わせて考察することとする。

和泉式部の歌の本文と主に引用した和歌の本文、及び注釈については以下の通りである。論文中では、紙数の関係で、次のように略称で表記する。

和泉式部集　本文

『和泉式部集・和泉式部続集』清水文雄校注（岩波文庫　一九八三）→和泉式部集（続集も含める）　注の引用　→　文庫

八代集本文　『新日本古典文学大系』（岩波書店）→新大系

なお、各勅撰集は古今集、後撰集のごとく略称を用い、『』はつけない。

注釈書

『和泉式部集全釈』正集篇　佐伯梅友・村上治・小松登美著（笠間書院　二〇一二）

同　続集篇（一九七七）　→　「全釈」

『和泉式部百首全釈』久保木寿子著（風間書房　二〇〇四）→「百首全釈」
『十三代集撰入和泉式部和歌抄稿』森重敏著（和泉書院　一九九三）→「抄稿」
『和泉式部集　小野小町集』窪田空穂校註　日本古典全書　朝日新聞社（一九六七）三版　→「全書」
※歌材としての桜、花は「桜」「花」とカッコを付け、自然の桜をいう場合はつけない。

二　桜の享受　―　折る一枝をめぐって

桜を折って賞美するという行為は、古今集においてはひとつの美意識を表す表現として詠まれ、後撰集においては人間関係の中で具体的に贈り贈られる行為として詠まれる。拾遺集、後拾遺集以降は、「桜」とともに詠まれた歌が選ばれることは少なくなったが、後拾遺集には「花見」の歌が多く詠われる。桜の季節に桜を折る、贈る行為は、和泉式部のころは特別な営為として意識されるほどではないものの、私的に引き続き行われていたと考えられる。[注1]

和泉式部において「折る」歌は、贈答歌、連作歌、独詠歌いずれの中にも見出せるが、折って自ら賞美し、その感慨を詠むという古典的な詠い方より、折って見せる、折って贈るなどの人と人とのつながりの中で、多様な詠い方で詠まれることに特色がある。そこには桜を愛する心があり、桜の一枝の美を共有できる者を結ぶ歌になっている。

次の歌は「折る一枝」をめぐる贈答歌である。

同じ頃、人のもとより、「桜の花を、また見すべき人もなければ、御料にとてただ一枝をなん折りたる」とて

157　また見せん人もなければ山ざくら今一枝を折らずなりぬる

かへし

158 徒らに此の一枝はなりぬめり残りの花を風にまかすな

此の歌の贈り主は源道済である。

雲林院の桜の一枝、あるあかりつかはすとて、（如本）

151 また見せむ人しなければ桜花今一枝を折らずなりぬる

和泉式部の返歌は『道済集』[注2]にはない。両集ともに贈った相手の名は記していないが、互いの私家集に収載されていることで、和泉式部と道済の贈答と判明している。後の勅撰集の新拾遺集巻二春歌下には道済の歌が、新後拾遺集巻二春歌下には道済の歌を詞書に和泉式部の返歌が、それぞれ入集している。

和泉式部集の詞書は『道済集』にはなく、また他出の勅撰集にもない。「桜の花を、ほかに見せるべき人もいないので、あなたにあげるただ一枝を折ったのみで、ほかの枝は折りませんでした」ということだが、この道済の歌は詞書と歌の両方で、「見すべき人もなければ」、「また見せん人もなければ」と繰り返して「ただ一枝をなん折りたる」、「今一枝を折らず」と、特別なことであると強調している。ほかに見せる人もいないからというのは、あなた以外にこの桜の一枝を贈るのにふさわしい人がいないからということである。和泉式部は、私にだけ見せるというけれども「此の一枝」は無駄になってしまったようですね、と私はその相手ではないと切り返し、暗にほかにも贈る相手はいるでしょうにという含意を込めて、残りの花を風に散らさないように、と返している。

和泉式部の歌にはしばしば、上二句あるいは三句と下句の間で、思いがけない展開を見せる歌がある。この歌もそうで、「此の一枝は無駄になった」という衝撃的な断言の後、下句ではいきなり「風にまかすな」と命じている。「桜を風にまかす」は古今集の貫之の歌「87山たかみ見つゝわが来しさくら花風は心にまかすべらなり」をふまえている。他にもこれを本歌としてよく詠まれている表現なのだが、否定形に用いられているものは少なく、「まかすな」

と命令形でとめる歌は例を見ない。「見すべき人もいない」と文と和歌とで繰り返しているけれども、わざわざ何度も断りを付けるからには、実はほかにも差し上げたい人がいたのでしょう、幸い「今一枝は折らず」桜はまだ残っているから、残りの桜の枝を本当に贈りたい人に贈るなら無駄にならずにすむ、「残りの桜を風にまかすな」他に贈ってください、というのである。

和泉式部集のこの157番の歌の前には（四）で考察する石山寺参詣の折の歌154、155、156番の連作歌がある。その連作の始めの歌154番の歌は、

石山より帰るに、遠き山の桜を見て

154　都人いかにと問はば見せもせん此の山ざくら一枝もがな

がある。この連作とは詠歌状況は別であるのだが、157番の詞書は「同じ頃、人のもとより」とあり、配列として時間的な関連性を持たせている。154番歌は花を思う都人のために「此の山ざくら一枝」が欲しいと歌うが、これは、157番歌の「ただ一枝を見せたいから折った」と同じ心である。（四）で述べるが、この154、155、156番は物語的な工夫が見られるところである。この贈答歌が同じ所に配されているのは、ある程度のまとまりを意識したものであろうか。

和泉式部集には、相手の名は記さずに「ひと」とする詞書が多く、相手の歌も書き残さない場合が多い。むしろ相手の歌は詞書の中に説明として含めてしまったらしき歌もしばしばある。この場合も道済とはいわず「人」とする。歌は書き残されているものの、内容はほぼ詞書で説明されており、相手の男（道済）の歌がなくとも和泉式部の歌単独で理解し得る。とはいえここでは、男の歌があるゆえに男側の視点も加わって、より複雑に、相互の思惑の交錯が描かれることになり、「桜の一枝」は人と人をつなぐものとして焦点化されている。また和泉式部の歌も、贈答歌の「切り返し」の軽口と見えて、男の他の女への思いを、あたかも第三者の視線から見透かすかのような、鋭さを獲得

している。

「ただ一枝」「今一枝」「此の一枝」と、「桜の一枝」を焦点化する軽妙なやりとりは、桜の季節に、美しい「此の一枝」を折って、贈り贈られることのかけがえなさをわかり合っている、親しい歌人同士ならではの贈答歌なのである。

和泉式部集には、99番から105番までの七首にわたる、帥の宮と藤原公任、和泉式部の花（「桜」）の一枝をめぐる連作があるが、複雑で煩雑になるので、別稿で改めて述べたい。

次に連作歌の中の「折る」歌であるが、1450番から1454番歌の中に次の歌がある。（連作歌としての考察は（四）で述べる。）

桜のいとおもしろう咲きたるを見て、往にし人のもとより、「散らぬ先に、今一度いかで見む」と云ひたるに、

1450 疾うを来よ咲くと見る間に散りぬべし露と花とのなかぞ世の中

といひやりて待つに、日比になりぬれば、いひやる

1451 来まじくは折りてもやらん桜花風の心にまかせては見じ

この1451歌は、美しい桜を「散らぬ先に見たい」と言いながら来ない男に積極的に「こちらから折っても贈りましょう」と歌いかけた点に面白みがある。折って土産にという歌はあるが、「折りてもやらん」は他に見ない。続く下の句では158番と同じく、古今集の貫之の歌の表現を否定的に用いて、風が思うままに桜を散らせるのを見るまいと結ぶ。女からの「折りてもやらん」は、「浮かれ女」の面目躍如の大胆さと見えるが、桜の美しさを見せたい、早く来ないと散ってしまうということ、そして先の1450番歌で歌いかけた、儚い「露と花」のなかの私達の仲という思いが、

女から折って贈る行為（実際に贈ったかどうかはわからない）の根底にある。桜への深い愛と、それを共有したい恋しい男への心が、重なり合う。「桜の一枝」を贈る行為には、儚くもかけがえのない「今この時」の美しさのなかにこそ、恋しい人との絆を確かめたいとする、和泉式部独特の思考が表れていよう。

独詠の「折る」歌には、帥の宮の挽歌群内の次の歌もある。

三月晦方に

998たれにかは折りても見せんなかなかに桜咲きぬと我に聞かすな

誰かが桜が咲いたことを知らせてきたのだろうか。和泉式部は折って見せる人もいないのだから桜の開花は教えてくれるな、と詠む。恋しい人との絆を確かめさせる「桜」が咲いても、もはや「折りても見せん」人はいない。「桜の一枝」は思い合う仲として居たときの、儚さとかけがえなさを思い起こさせ、孤独の深さをえぐる景物となっている。

これについては、「全釈」や「抄稿」はそれぞれ本歌として古今集巻第一春歌上紀友則の「38きみならで誰にか見せむ梅花色をも香をもしる人ぞしる」や、後撰集巻第二春中大将御息所「61咲き咲かず我にな告げそ桜花人づてにやは聞かむと思し」をあげる。和泉式部の歌は、こうした歌の伝統を正しく受け継ぎつつ、1451番歌のように時に大胆に、158番歌のごとく時に相手の胸奥を見透かす鋭さをもって、「一枝」がつなぐ人との絆を見つめる。そのまなざしの深さが、宮を失った孤独の深さを表現し得ているのだろう。

この歌の一つ前の歌は梅の花と見られるが、

997手折れどもなに物思ひもなぐさまじ花は心の見なしなりけり

という歌があり、同じく花を見つつも心慰められぬのは、結局「花」は「心」の見せるものなのだったと詠われてい

る。花の美しさは、むしろこれを共有する相手への「心」が見せるものなのだろう。和泉式部にとって「桜の一枝を折る」は単なる美意識ではなく、桜への思いを伝え、共有する、人を恋うるおのが思いを見つめる行為なのである。

三「桜」と「こころ」

「桜」と「こころ」を詠んだ歌は、古今集から見られ（八首）、後拾遺集に十四首見られる。「こころ」を詠う発想の変化として、古今集では、自分に限らない世間一般の桜への「人の心」や、擬人化された「桜の心」、「風の心」に我が心を重ねるなど、「〜心」「〜の心」という形をとって散る「桜」に寄せる心情を詠んでいる。後撰集では特に際だった特徴は見られないが、拾遺集になると用例は多くはないが「心のどけき」「心やすく」などの形容詞が見られ、詠者の心の状態をそのまま示す表現が出てくる。また後拾遺集では「こころ」を詠む表現には、「思ひやる心」、「あくがるゝ心」、「心のまゝに」、「心は雲の上まで」、「心をやりて」、「心をくだく」など、多様な形が見られる。これらは具体的な自らの行動を伴うさまざまな「心」の形が詠まれているということである。[注3]

和泉式部集においては、「桜」と「こころ」が詠み込まれている歌は概ね十三首である（重出歌は含まない）。以下、表現の例を見ていく。

まず、自らの「心」をひとつの対象にむかって作用させるという表現として、「心をかけて」「心をとめて」「心をぞやる」（「心をたれかやらまし」）と詠む歌がある。

5花にのみ心をかけておのづから人はあだなる名ぞ立ちぬべき

この歌は和泉式部集の冒頭「初期百首」に含まれる歌である。初期百首のこの歌の配列としては、初期百首春二十首の中の5番目であり、4番梅、6番は春の日、7番春の夜、8番梅が香、9番春の野の花の歌をへて桜の歌は10番

まで出てこない。この配列上、「花にのみ」の「花」は「梅」と解釈する説（「全釈」）と、この古今集の「あだなり」の下句を詠み込んでいることから、「桜」との解釈（「百首全釈」）とする説、また「抄稿」はこの歌にとって「桜か梅かは、つまりいづれはでもよいことではある」とする。鈴木宏子氏は、「やはり桜を思う歌なのではないだろうか」とし、「⑤は桜の開花を待ちつつ、この花が、春の間ずっと心を占めるであろうことを詠じた歌なのではないか」として現代語訳は「桜はいつ咲くのか、花のことばかりを心にかけるうちに、いつのまにか、春を過ごす人は花と同じように浮気者だという評判がたってしまうのにちがいない」とし、「梅を詠じる歌のはざまに、桜の開花を予感する歌を織り込んでいるのである」とされている。[注4]

他出である続後撰集には桜の歌群に入っている。先に示したようにこの5番歌の前後に梅は出てくるが、必ずしも梅歌群ではなく「花にのみ」といえるほどの花はやはり桜を意識していると考えたい。

「心をかく」は、和泉式部集の用例ではほかに一首、続集934番に見るが掛詞に用いられ意味が違う。また「心にかく」という用例はあるが（404番）、この場合は「人知れず心の中で気にかけている」の意になる。すなわち、「心をかく」、一心にあるものに夢中になるという意味での用例はこの歌のみである。

「花にのみ心をかく」は一心に桜のみを愛することである。これは好忠の『毎月集』[注5]に同じ「花に心をかける」例として「38ゆふだすき花に心をかけたれば春は柳のいとまなみこそ」が見られる。この歌は花に執着することが詠まれているのだが、和泉式部歌はその花が散りやすい、移ろいやすいものであるから、花に執着することで、おのずとあだなる名が引き出されてしまうと詠んでいる。「おのづから」は和歌では平安中期以降に多く見られる語句である。

下句はよく知られた古今集巻第一春歌上のよみ人しらず「62あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり」の上句を用いている。「あだなる」「あだなり」は多く用いられる言葉であるが、「名がたつ」まで詠み込んで

いる歌はそれほど多くない。和泉式部は三首（193松　1452桜）詠んでいる。この古今集の歌は直接的には「桜」が「あだなり」であるが、和泉式部の歌はあだなる「桜（花）」に「心」をかける「人」までを「あだなり」と詠む。「人」は自分自身を含めて一般の人である。この「あだなり」の句を入れることで、具体的な対象物としての実際の桜を超えて、客観的に、詠者を含めての、桜によせる「人の心」を見つめているのである。浮気と名を立てられようとかまわない、とはかない花にかける、人の心の一途さが表現されている。

次に「心をとむ」の用例をみる。

野の花を、馬に乗りたる人三人ばかり、見て過ぐる所

188あるかぎり心をとめて過ぐるかな花も見知らぬ駒にまかせて

桜狩りにあまたゆく人ある山を過ぐ

＊853あるかぎり心をとめて過ぐるかな花も見知らぬ駒にまかせて

この歌は和泉式部集187番から198番の「人の、屏風の歌詠まするに、はるの」12首の2番目で、重出歌は851番から865番「権中納言の屏風の歌、桜咲きたる家に客人おほかり」15首の3番目の歌である。両歌群は歌数も違い、詞書、歌の語句にも異同が見られる。この188番と853番の歌についても、歌に異同はないが詞書に大きく違いがある。この歌は詞書によると、188番歌の方は騎乗の三人が「野の花」を見て過ぎようとするところ、一方853番では桜狩りに大勢の人が山に行く様子と、場面の図柄が違うように推察できる。この屏風歌は、同時に源道済と大江嘉言が詠んでおり、この歌に該当する場面の歌と思われるものは『道済集』では詞書はなく帰り道の旅の歌になっており、『大江嘉言集』（新編国歌大観）では次のような詞書を持つ。

むまにのりたる人二三人ばかり桜の花のもとをすぐ、しりにゆく人花をみる

121よそながらみてやすぎまし桜花我ひとり行くみちにしありせば

屏風歌には実際に絵を見て詠む場合と、見ないで題を与えられて詠む場合があり、桑原博史氏は「道済集をはじめ三つの歌集の記録は、その図柄の示し方にそれぞれ自分流に多少の解釈を加えて、各歌の詞書として記録したのであらう」と『道済集全釈』解説[注6]にあり、田島智子氏は別の歌の観点からこの屏風歌は言葉の題を与えられて詠んだのではないかと推察されている。[注7]

「あるかぎり」、「心をとむ」はいずれも同時代では和歌に詠まれることは少なく、中世以降の表現であり、和泉式部集においても両方ともこの歌のみに用いられている。

「あるかぎり」は桜を見ている人々のすべてと、「あるかぎりのこころ」とかけられているので、「ありったけの心を花にとめて」との意を表現している。ただ、詞書の差異は少し解釈に影響する。188番のそれは騎乗の三人が「ありったけの心を花にとめて」いる様子が推察できる。これは嘉言の歌にも通じる。853番はむしろ桜狩に行くたくさんの人々すべてという意の方が強く表現される。いずれにしても、人が花に尽きせぬ思いを寄せていることを、「あるかぎりの心をとめて」と詠んでいるのである。

一転して「花も見知らぬ駒にまかせて」と、花の美しさなどわからない駒の歩みにまかせるという下句は、花に耽溺する「人」と何の感慨もない「駒」の対比が鮮やかで、ユーモアすら感じさせる。

近藤みゆき氏は「花も見知らぬ駒にまかせて」は『白氏文集』の「尋花信馬頭」、「信馬閑行至日西」、『類聚句題抄』の「尋花信馬行」の関連を指摘され、「いわば〝馬に信せて行く〟とは、早い時期から本朝詩にも定着していた、尋花の常套句であった。和泉式部では『駒にまかせて』の言葉続きそのものの相通性によってそうした漢詩が好んで描く尋花の世界を引き寄せながら、しかもその身を委ねる駒は花の情趣を解さず進んで行くと、ひねりをきかせたもの

と解される。」とされている。[注8]

上句が「あるかぎり心をとめて」という独特の表現を用い、下句が詩の常套句の受容ということならば、これまで見てきた歌とも似て、上句の聞き慣れぬことばのあとに、よく知られた古今集の句を持ってきて、歌全体としては独自の表現となる手法といえる。画中の人物になって詠むのが屏風歌であるが、和泉式部のこの歌は画中の人物になりきるというより、むしろ画中の人物を超え、「あるかぎりのこころをとめて」花を見る和泉式部の感性が際立っている。

次は「心をやる」の用例である。

二月の桜のおそき頃

176 待たせつつおそくさくらの花により四方の山べに心をぞやる

桜の遅く咲く事を人のよむに

＊1266 待たせつつ遅く桜の花により四方の山べに心をぞやる

この歌の「心をやる」は「心を擬人化して、使ひに出すやうな気持であらうか」と「全釈」にあるように、ずっと待っていて、なかなか咲かない桜のために、あちこちの山辺に心を馳せると言う気持ちを詠んでいる。和泉式部集ではほかに533番に「心をやる」表現がみられるが、意味が違う。後拾遺集巻第一春上には平兼盛の「河原院にて、遙かに山桜を見てよめる　97道とをみ行きては見ねど桜花心をやりて今日はくらしつ」があり、遠い山の桜は見ることが出来ないのでを心を馳せるという意は同じである。ただ、和泉式部の歌には「四方の山べ」とあり、一方方向をみているのではなく、四方という空間的な広がりがあり、あちらこちらに心をやるという、桜を待つ落ち着かない気持ちを表している。

また、「おそくさくら」は「遅く咲く」と「桜」を掛けているが、和泉式部以前にはほぼ見られない。和泉式部では他に666番に「おそく桜の花をこそ見め」（六まとめで後述）がある。この後も用例はわずかであるが、西行、慈円がこの言葉を用いて詠んでいる。

桜のいとおもしろきを見て

999花見るにかばかり物の悲しきは野辺に心をたれかやらまし

この歌は帥の宮挽歌群の中の歌である。「野辺」は、古今集巻二春歌下、素性「96いつまでか野辺に心のあくがれむ花しちらずは千世もへぬべし」、後撰集巻三春下典侍よるかの朝臣「112春くれば花見にと思ふ心こそそのべの霞とともにたちけれ」に見られるように、野辺には美しい花が咲き、人は花に憧れる気持ちを沸き立たせ、そして花見に出かける頃である。この歌は、それらの発想の伝統を踏まえ、おそらく身近な美しい桜を見てもこのように悲しいのに、誰が野辺に心をやって（桜を見に行つて）楽しもう、到底そのような気持ちになれないということである。この歌も帥宮が亡くなったあとの悲傷の歌であり、前節に見た歌と同様に、ともに桜を見ることがもうかなわないということが心にある。

以上の「心をかける」「心をとむ」「心をやる」の三例は和泉式部集の中でほぼ「桜（花）」に対しての表現である。この語句は「桜」によって選ばれた、「桜」の歌こその思いを表すことばといえよう。

次に「風の心」の歌である。

日頃、花おもしろき所にあるを、今日ほかへ行かんとするに、いみじう散れば

1354吹く風の心ならねど花見ては枝にとまらぬものにざりける

風を擬人化し、風に心をみる表現は古今集に詠われて以来、数多く詠まれている。この和泉式部の歌も古今集を意

識していると考えられるが、1354番歌は、古今集巻二春歌下、「99吹風にあつらへつくるものならばこの一本は避きよと言はまし」や、「106吹く風をなきて恨みようぐひすは我やは花に手だにふれたる」などに詠まれる、吹く風の意志で花が散るという意も含んでいるだろう。

詞書は、何日か桜の美しい所に滞在していたが、今日よそに移ろうとしたらひどく散ったのでとあり、散った理由は風が吹いたからなので、「吹く風の心ならねど」つまり、私の心は吹く風の心とは違うのだけれど（花を散らすつもりはないけれど）と詠む。ここで上句は切れ、「花みては」以下の句は詠者を主語として、散る花を見て、花は枝に止まらないものであったと思う。それは自分の心がそこに留まらないことを表現しているのではないだろうか。それは「あだ」にも通じるこころである。

「折る」のところでもふれたが、和泉式部の歌には、上二句又は三句の間に一つ呼吸をおいて、下句で違う展開を見せることがある。この歌も二句目と三句目を続けて解釈しようとすると、わかりづらい。

「全釈」では次の1355番歌に続けて考えるべきと指摘している。

また、人の常に居し所に書きつく

1355 待ち侘びて行く方も知らずなりにきと君来て問はばとくて答へよ

この歌を含めて考えると、わざわざ花の美しい時に他へ移ったのは、恋人を待ちわびてのことで、家を去るときにそこにこの歌を書き残したということになり、また新たな物語を想像させる。

和泉式部集の中では「風の心」はこの歌と、「折る」項で取り上げた1451番の二首のみであり、他に紅葉などに用いられた例はない。和泉式部は、「風の心」は古今集の「桜」歌の受容であり、「桜」を対象にするもの、ととらえていたのではないだろうか。

「花の時心不静、雨の中に松緑を増す」といふ心を、人のよむに

459 のどかなる折こそなけれ花を思ふ心のうちに風は吹かねど

460 松はそのもとの色だにもあるものをすべて緑も春は異なり

この歌は詞書の前半「花時心不静」、に照応する歌である。この歌は、既に『嘉言集』、『道済集』との関連が指摘がされている。[注9]『嘉言集』の114番の詞書は、「花心しづかならず」、115番「はるのこまつみどりをます」の題で詠まれており、同じ題詠であることがわかる。『道済集』は、264番歌の詞書に「三月五日、中宮大夫（の）、法住寺にて人々詠みし。二首。春残花。」、265番歌は「雨中小松」の題がある。この時の「中宮大夫」は藤原斉信であり、前述したようにこの三者は「権中納言の屏風の歌」をそれぞれ詠んでいて、この権中納言は藤原斉信と推測されている。これらから、和泉式部は他の二人と詠歌の場を共有する機会があり、この二首の歌もそうした機会で詠まれた歌のひとつであったとも考えられる。詞書は漢詩からは出典不明とされているが、「人のよむに」とあるので、その場で出された題なのではないだろうか。この歌は業平の古今集巻一春歌上「53世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」を本歌とするが、同じく貫之の巻二春歌下「82ことならばさかずやあらぬさくら花見る我さへにしづ心なし」などの意も含まれよう。和泉式部の歌は「心のどかな時はない」と詠む。桜は咲いたと思えば散り始めるから、つまり外吹く風が桜を散らすからである。そして、花を思う「心のうち」には風は吹かないのだが、だから桜は散らず心静かなはずであるのにと詠んでいる。屋外に吹く風に散る桜を見て惜しむ心を詠むというのは、散る桜の歌の常套であるが、和泉式部はその惜しむ心を、自分の「心のうち」の状態を詠んで示すという表現に、特色がある。

この「こころ」の項で論じた歌には、「心」を第三者的視点からみた歌はない。5番では「人は」と客観的な視点で詠んでいるように見えても、「花にのみ心をかけて」ているのは詠者自身である。屏風歌にしても、画中の人物に

自らの桜への思いを投影しているのでなければ「あるかぎり心をとめて」という表現にはなり得ない。「風の心」は「風」の姿が擬人化されて詠まれているわけではない。題詠も自らの心のうちを表現している。すなわち、詠まれているのは、和泉式部の桜への「心」のありようなのである。

四　桜をめぐる連作歌

和泉式部の「桜」の歌の中で、時間を追いつつ場面が展開する歌群がいくつかある。次の歌群は正集と続集に重出する。まず続集の方からみてみる。

二月晦日方に、物に詣づる道なる法住寺の桜見んとて、入りたれば、

花もまだ咲かざりけり、知りたりし僧のありし、問はするもなし

1099 咲きぬらん桜がりとて来つれどもこの木のもとの主だにもなし（155）

同じ道なりし所に入りて見れば、そこのもまだしかりければ、柱に書きつく

1100 それまでの命たへたる物ならばかならず花の折に又来ん（156）

逢坂の関にて、いと苦しければ休むとて、つくづくとゐて

☆1101 雲居まで心はゆけど逢坂の関こえぬべき心地こそせね

もろともなる人の、「帰りなん」といふに

☆1102 留まれとも行けともいはでこころみん何のためなる逢坂の関

山科といふ所にて、苦しければ休む、その家主の心あるさまに見ゆれば、

「今帰さに聞えん」などいひて

☆1103 帰るさを待ちこころみよかくながらよも尋ねではやましなの里

かくて詣で着きて、「花さかざりけり」など、もろともなる人のつれづれがりければ

1104 常磐山春は緑になりぬるを花咲く里や君は恋しき

哀れにおぼゆれば、手すさびに軒檻（おばしま）に書きつく、日頃籠りて、出でなんとするに

☆1105 憂き世には猶帰らでや止みなまし山より深き谷もありけり

帰るとて、山科の家にいひやる

☆1106 君ははやわすれぬらめど御垣根をよそに見捨てていかが過ぐべき

続集の桜の歌は1099、1100番の二首であるが、「物に詣づる」は、正集によれば石山寺で、続集でもこのあとの詠まれている歌をたどれば、石山寺であろうことは推測される。

1099番歌の「法住寺」は平安中期に藤原為光が永延二年（九八八）建立した寺で、現在の京都の東山区のあたりにあった。まずそこの桜を見ようとしたが、花が咲いていなかった、知人の僧がいたので尋ねさせたがいなかったので、会うこともできずに詠んだとする。

「桜がり」は「花見」と同義で、拾遺集にも見られるが、多くは中世以降に多く見られる語である。和泉式部の歌では「権中納言の屏風の歌」853番の詞書に「桜狩りにあまたゆく人ある山を過ぐ」がある。この歌での「桜狩り」は「桜許」とかけ、「木のもと」にも対応する。「主だにもなし」の「も」で、桜も咲いていなければ、主もいなかった、と歎いているわけだが、このあと、1100番では、同じ道の別の寺に行き、そこもまだ咲いていなかったので柱に書き付けたと歌う。「それまでの」は「次の桜の季節まで」であろうか、または、今咲いていない桜がもうしばらくしたら咲くまでの短い時間「命あるものなれば」ということであろうか。花の咲いているときにまた来ようと詠んでいる。

このあと「逢坂の関」で二首、山科の里で一首歌を詠んでいる。京からは山科を経て、逢坂の関を越えて近江国に入るのだから、道順で言えば1103歌の後に1101、1102歌が来るべきで、不審である。そして石山寺に詣で、やはりそこにも花は咲いていなかったと一緒に行った人が残念がったので、1104番の歌を詠んだ。この歌は古今集の源宗于の「24常磐なる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり」をひき、山も春になれば美しい緑になるのに、「花咲く里」があなたはそんなに恋しいのかという意であるが、「全釈」は「ここでは下界・俗界の心を含める」とする。この歌の「花」は直接桜の花を指しているわけではないが、詞書の「花さかざりけり」の花は一連の歌から桜と解される。その後、寺を出て、行きに寄った山科の里の主に消息を送る。

一連の歌は詞書と歌を連ねて、あたかも石山寺への道中記のごとくつづっている。「逢坂の関にて、いと苦しければ休む」、「山科といふ所にて、苦しければ休む」と疲労困憊している様子がわかる。『和泉式部日記』[注10]には、八月に石山参詣をしたことが書かれており、ここは道中の記述などはないが、帥の宮が参籠中の和泉式部に童に手紙を届けさせる場面で、その童に宮は「苦しくとも行け」と命令しており、石山寺の往復は大変だったことがわかる。これらの歌は、石山寺参詣の道中の連作とも取れるが、冒頭の二首で桜を歌に詠んで、最後に石山寺で「花さかざりけり」に対して歌を詠んだことで、「桜」、それも咲いていない桜を追って詠んだ連作にとれるのである。

では正集の方の歌を次にあげる。

石山より帰るに、遠き山の桜を見て

154 都人いかにと問はば見せもせん此の山ざくら一枝もがな

同じ道なる寺に入りて見れば、ここの花は咲かざりければ、

知りたりし僧のありしを問はするも、なければ

155 咲きぬらん桜がりとて来つれどもこの木のもとの主だになし（1099）
156 それまでの命たへたる物ならばかならず花の折りに又見ん（1100）

154番は、後拾遺集巻第一春上（100）に「遠き所にまうでて帰る道に、山の桜を見やり」という詞書で入集している。この歌は古今集巻第十八雑歌下小野貞樹「937宮こ人いかにと問はば山たかみはれぬ雲居に侘ぶとこたへよ」の上句を用いている。この「都人」は多くの歌に詠まれているが、この上句「都人が問ふ」意を詠んだ歌は多くはない。中世に至って、「都人」が「問はで」の意の歌が散見される。小野貞樹の上句をそのままそっくりなぞって「都人いかにと問はば」と詠む歌はこの歌くらいしか見当たらない。歌意が似たものには、『公任集』に女院の住吉詣に同行した道長が公任に贈った歌がある。[注11] 和泉式部の歌では、「山の桜」について「いかに」と問われたら見せもしましょう、この（あの）山の桜の一枝をほしいものです、と小野貞樹や道長とは違い、詠者についてでなく「桜」について、「いかに」と問われたとする。

154番歌の詞書は「石山より帰る」道筋で詠まれたとする。そして、そこから京へ帰る同じ道にある寺に寄ったら花は咲いていなかったということで、155番、156番の歌が詠まれている。この歌は前述の続集1099番、1100番と語句の異同はあるが、同じである。違うのは1100番歌にある詞書がないことで、156番は155番と同じところで連続して詠まれたことになる。それも続集とは違い、石山に行く道筋ではなく、帰り道の寺である。

この歌群は続集から正集のそれに整理されたと見たい。まず、詞書が簡略化されている。154番の歌をこの二首の前におくことで、遠くの山桜を眺め、「此の山ざくら一枝もがな」と詠んだあと、155番の「ここの花は咲かざりければ」という歌に繋がることになる。

続集の方は「法住寺」の花を見ることから石山詣でが始まるのだが、創健者の藤原爲光は正暦三年（九九二）に亡

くなっているが、以降長元五年（一〇三二）に焼失するまで法住寺は威容を保っていたと考えられるので、寂しいところであったはずはなかろう。法住寺の知人の僧もたまたま不在という感じで特にさびれた雰囲気はない。正集の歌群の方は石山寺からの帰り道であるから、「同じ道なる寺」は「法住寺」を離れて山中のもの寂しい寺をイメージさせる。寺の知人はおそらく亡くなっており、それは156番で自らが「命たへたる物ならば」と詠んでいることからも推察されよう。そしてまだ咲いていない桜、「桜狩り」の楽しみとはとは裏腹な趣きでまとめられているわけである。帰り道であれば「それまでの」は、いつとわからない次の参詣の折という意味になり、「命たへたる物」ならば花の折りに必ず見よう（続集では「来む」）という語も、諧謔味を狙った大げさなもの言いを超えて、切実な感情がこもる。

正集、続集いずれの歌群が先に詠まれたか、また和泉式部自身の手になるものかは、詠歌より推測するしかないのであるが、「物語化」ということが意識されているとすれば、正集の方の歌群によりはっきりと表われているとみることができる。

この歌群の「桜」は、満開の桜ではなく、散り始めた桜でもない、咲きはじめていない桜である。「桜」の歌は花は咲くとまもなく散り始め、それをはかない、移ろいやすい、と無常感につなげてゆくのが定番の詠い方である。ただ、まだ咲いていない桜ならば心待ちにするという歌い方も多いのに、どこか寂しさを感じさせるような歌群になっているのはなぜかと言えば、「それまでの命たへたる物ならば」という句ゆえであろう。桜を咲くまで命があるかという、またこの次の花盛りの桜を見るまで生きているかどうかわからないという思いを抱え、桜と共に人の命の儚さを鋭く見つめているのである。

次の歌群は続集の終わりの方にまとまっている歌群である。

桜のいとおもしろう咲きたるを見て、往にし人のもとより、

「散らぬ先に、今一度いかで見む」と云ひたるに、

1450 疾うを来よ咲くと見る間に散りぬべし露と花とのなかぞ世の中

といひやりて待つに、日比になりぬれば、いひやる

1451 来まじくは折りてもやらん桜花風の心にまかせては見じ（二　既出）

といひたれば、「なかなかあだの花は見じとてなむ」と云ひたるに

1452 あだなりと名にこそ立てれ桜花霞のうちに籠めてこそをれ

同じ頃、女客人の詣で来て、物語などして帰りぬるに

1453 我が宿の花を見捨てて往にし人心のうちはのどけからじな

松竹などある中に、桜の咲けるを見て

1454 常磐なる物ともやがて見てしがな松と竹との中にさくらを

詞書からみると、前三首は男とのやりとり、四首目の「往にし人」は女客のことではなく、一首目の「往にし人」と同じと見られる。五首目は一首目の「露」と「花」のなかに対して、いつまでも変わらない「松」と「竹」のなかを詠んでいることで、この連作の一首と見る。この連作は和泉式部集中の重出歌もなく、勅撰集等の他出もない。

1450番は詞書の「桜のいとおもしろう咲きたるを見て」について、「全釈」では

「往にし人」がその後の春に垣越しにでも花を見て、言ってよこしたのであらう。まさか花の咲き初める頃別れて、その年の春言ってよこしたのでもあるまい。ただ五五一（一四五三）の歌から見ると、別れたのは、ある年

の桜のころだったか。

とある。「見て」の主語は「住にし人」とすると、「往にし人」が和泉式部の家の桜を通りがかりにでも見て、「散らぬ先に、今一度、いかで見む」と云ってきたということだろう。「往にし人」を含む歌には、1450番、1453番のほかに、詞書にある歌四首、歌一首ある。「物へいにし人」「遠くへいにし人」などがあり、遠くに行ってしまった恋人を歌うのによく使う表現なので、この場合も別れた男とすると、桜を口実にもう一度会いたいと云ってきたのでという意になる。その別れた男が一度通りがかりに見て消息をよこしたということであろうか。それは1453番歌にもかかわってくる。

この1450番の歌は「疾うよ来よ」、「露と花のなかぞ世の中」がポイントである。

「疾う」は「疾く」の音便である。そして「疾うよ来よ」は人に対する呼びかけの命令形である。このウ音便の語（口語体であるか）を使うことと、命令形を初句にもってくる歌は非常に珍しいのではないだろうか。少なくとも、勅撰集の春歌には見られず、同時代の何人かの家集にも見当たらなかった。初句に人に呼びかける命令形には「忘るなよ」があり、別離などに、特に中世以降多く使われている。和泉式部集では、男の代作で「1115おぼめくな誰ともなくて宵々に夢に見えけん我ぞその人」（後拾遺集巻第十一恋一611）という歌がある。この命令形の「疾うよ来よ」を初句に持ってくるという大胆さと、そもそも女性が自分の思いをストレートにぶつけるのは和歌だからできる表現ではなかろうか。

「露と花とのなかぞ世の中」は、露はおくとすぐに消え、桜は咲いたと思えばすぐ散り始める、両方ともはかないもの同士の間柄、それが世の中―男女の仲であるのだという。「疾うよ来よ」とは積極的な呼びかけではあるが、根底にはこのような諦めに似た「はかなさ」への思いがあるのである。でも、しかし、一方それはわかっていても、や

はり待っているのである。それが次の1451番の歌である。

この歌は「折る」項でも考察したが、「散らぬ先に」といってきた男に、早くと呼びかけて待ったけれど、数日たってしまった。花は散ってしまう。そこでこちらから折って贈ろうと詠む。「いひやりて」、「いひやる」と詞書に二度もあるところを見ると、男の返事もなかったのであろう。「来まじくは」の「まじ」については、

中古においては、和文の散文に見られ、和歌ではあまり見られず、八代集では五、六例用いられているにすぎない。また、漢文訓読資料においてもあまり見られない。中世以降、口頭語では次第に「まじい」「まい」が勢力を広げ、「まじ」は徐々に衰退していく。

（『日本国語大辞典』）

とある。この語が使われていること自体が稀なことであり、それも初句にもってくるということはもっと例がないと考えられる。かなり直接的な物言いで、続く「折りてもやらん」で積極的な意志を示し、下句は「風の心にまかせる」という古今集以来の表現を取り入れ、我が家の桜を風にまかせて散らせることを、反対に「見じ」と結んでいる。これに対して男は同じ古今集の表現を使って「あだの花は見じとてなむ」といってよこした。和泉式部はまたさらに次の1452番で、古今集の二首の表現を用いて詠んでおくる。古今集巻第一春歌上読み人しらず「62あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり」と、春歌下良岑宗貞「91花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風」の両方の上句を組合わせているわけである。1452番歌は、古今集62番の下句の意も充分にふまえて待つ心を含み、桜花を「風のこころにまかせず」霞にこめているのである。これも古今集91番の下句の「山風」に響かせているわけである。

このように、1451番、1452番は古今集の表現を関連させているのであるが、もう一つ、「心」のところで考察した、初期百首の「5花にのみ心をかけておのづから人はあだなる名ぞたちぬべき」の発想が大きくかかわっているのではな

いか。花に一生懸命心をかけると、桜があだに散るものであるから、人もあだであるという名がたってしまうという発想をこの二首にあてはめれば、桜を愛して「あだなりと名が立つ」は和泉式部の自身のことを指しているのであろう。

1453番は、同じ頃女客人が訪れて物語りして帰ったあとの歌であるが、「まで来て」と丁寧語を用いている女客に対する気持ちは、古今集巻第一春歌上の躬恒の歌「桜の花の咲けりけるを見にまうで来たりける人に、よみて、それが贈りける　67わがやどの花見がてらに来る人はちりなむのちぞ恋しかるべき」であろう。女客人があったのをきっかけに去って行った人への思いがかき立てられて、女客に贈るのではなく、おそらく独り言のように、1453番を詠んだのであろう。「わがやどの花見がてらに来る人」ではなく、古今集の歌のリズムそのままに意をかえて「我が宿の花を見捨てて往にし人」と詠む。「往にし人」は1450番の去った男である。下句はやはり古今集春歌上業平の歌「53世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」によって、男は桜も見ないで行ってしまったので心のうちはのどかでないでしょうというわけであるが、自分には逢いに来ないで心のどかではあるまいよという恨みを含めているともよめる。

結局、男は来なかったのであろう。1454番は変わらぬものとされている松竹の中に咲いている桜を見て詠んだ述懐である。『藤原清正集』（新編国歌大観）に「41ときはなるまつとたけとをやどにうゑてあきはくれどもものおもひもなし」、後撰集巻第二春中坂上是則「前裁に竹の中に、桜の咲きたるを見て　54桜花今日よく見てむ呉竹の一夜のほどに散りもこそすれ」などでもわかるように、当時前裁に松と竹が植えられ、桜も植えられていた状況があった。松と竹の中に咲く桜を、松や竹と同じように変わらない物としてずっと見ていたいものだという。最初の歌、「咲くと見る間に散りぬべし露と花とのなかぞ世の中」がこの1454番の嘆息の中で生きてくるわけである。

この連作の特徴は、ひとつは見て来たように、古今集の数首の歌を取り入れていることである。その技法は、明らかに句をそのまま用いているが、新しい表現と組合わせる、本歌の意味を否定したり、裏返しする、二首を大胆につなげて別の歌を作る、など具体的な用い方はさまざまで、非常に巧みに詠みこんでいるのである。もうひとつは、これが単なる技巧的な歌にならず、和歌としての情感を有していることである。それは和泉式部ならではの表現のうまさゆえだけではなく、桜のはかなさへの共感、それ以上にはかない世の中、男女の仲という諦めの気持ちをどこか感じさせるからである。「往にし人」、男がおそらく軽い気持ちで贈ってきた便りに応じて積極的に誘い、桜の枝をこちらから贈ろうといったり、女性としては大胆な姿勢であるものの、これらの行為は最初の歌の「露と花のとのなかぞ世の中」と認識している上でのことである。無常と知り、なおかつ待ち続けずにはいられないところに、やはり悲しさがある。この歌群での「桜」は、はかないものの象徴であるといえよう。

五　和泉式部と桜

ここでは、これまでに取り上げた歌以外の主に独詠を中心に、「桜」を主題とする歌を詠むことは和泉式部にとってどういう意味があるのか、和泉式部にとっての「桜」とは何かということを考えていきたい。

まず、桜そのものを詠んだ歌を見る。

690　夕暮に、遠き桜を見やりて

匂ふらん色もみえねば桜花心あてにも眺めやるかな

「心あてに」は古今集巻五秋歌下の躬恒の歌「277心あてにおらばやおらむ初霜のをきまどはせる白菊のはな」が本歌であるが、意外にも平安中期には用例が少ない。源氏物語夕顔の巻に「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる

夕顔の花」[注12]の例がある。あとは中世以降の歌が多い。霜と菊、雪と梅、霞と桜などと共に詠まれるが、光経、良経の歌に山桜とともに詠んだ歌があるが、これは和泉式部の歌の影響もあるかと考えられる。

和泉式部はこの歌で、夕暮れに紛れて、美しく咲き匂っているであろう桜花が見えないのであて推量で眺めているという。古今集の初霜、白菊の冷たい白い印象と異なり、昼が長くなった春の夕暮れの伸びやかさと、桜の美しく「にほふ」色とが照り映えて、暖かく艶な印象をかもしだす歌に詠んでいる。

庭の桜の多く散りて侍りければよめる

148 風だにも吹きはらはずは庭桜散るとも春のほどは見てまし　（後拾遺集巻第二春下）

この歌は和泉式部集にはない。後拾遺集の新大系の注では「風に散る花を詠むのではなく、散り落ちた地上の花びらが風に吹き払われることを惜しむ珍しい趣向の歌」とある。拾遺集巻第一春には、よみ人しらず歌として、「延喜の御時、藤壺の女御歌合の歌に61朝ごとに我がはく宿の庭桜花散るほどは手もふれで見む」、『赤染衛門集』[注13]には「庭に積もる花を風の吹き散らすを　495散りてだによるべき物を桜花庭をさもはく風の心よ」がある。

拾遺集の歌のように桜の散り積もった庭を掃くのは人の役目であり、その花を花の散っている間は掃かないでおこうと詠み、赤染衛門はこれを「散る桜にさえも心をよせるのに、それをさも掃くように吹き散らす風の心よ」と詠んでいる。和泉式部の歌は拾遺集の庭の散り積もった花びらを掃かないでおこうという意と、赤染衛門の掃いているのは「風」という意の両方の心を展開するような詠み方で、地面に散った桜をそのまま鑑賞しよう、風さえ吹かなければ春のあいだずっと見ていられるのだからと詠む。この歌では「人の手」は関係しない。散り敷く桜を惜しむこの歌で後拾遺集の桜の歌群は終わるのである。

以上の二首は特に新しい言葉を用いているわけではなく、古典的な言葉で、また桜を詠む環境としては当たり前の

設定なのである。だが、690番の歌は、たとえば霞の向こうの桜を思いやるのではなく、夕暮れの山の桜をあて推量で眺めるといった趣向にしていることと、「匂ふらん色」ということばが、夕方の情景とあいまって独特の雰囲気をかもしている点で、和泉式部の繊細な感性というものが読み取れるのである。

また、後拾遺集の歌は前述のように咲いた花を散らす風ではなく、既に散ってしまった桜を吹き散らす風を厭うのである。そして散ったあとも、庭に敷きつもる桜を春の間鑑賞したいと、「散る桜」の歌はおおむね散るのを惜しむ歌であるが、この歌は散ったあとを惜しむ心を詠んでいるところが、やはり同じように感性の鋭さを感じさせる。

次に人に贈った歌、人との関わりはあるが独詠と考えられる歌を考察する。

三月ばかり、人の来むとて、ただに明かしたるつとめて、いひにやる

181 夜のほどもうしろめたなき花の上を思ひがほにて明かしつるかな

この歌は続集に重出歌（**1146**、**1340**）を持つ。続集の二首は、詞書に微妙な差異があるものの、歌は同一である。正集181番との違いは、「うしろめたなき」が続集は「うしろめたきは」となっていることであるが、歌の意味は同じである。詞書が、続集の方は単純に「二月ばかり、人の頼めて来ずなりぬるつとめて」（1146 1340は「来ずなりにし」）となっており、二月と三月の違いもあるが、正集の方がより詳しい説明になっている。

「うしろめたなし」は「うしろめたし」と同義語だが、和歌の用例では「うしろめたし」は多いが「うしろめたなし」は少ない。和泉式部以前では『恵慶法師集』（新編国歌大観）に二首ある。「257ささがにのいやはねらるるはるの夜のうしろめたなき花を思ふに」はこの歌同様に、「夜のうちに散ってしまうかもしれない桜が気がかり」という意味に使われ、「うしろめたなき」は和泉式部の歌の中ではこの一首のみである。

来るといってきた人が現れず待っているうち朝になってしまったという状況は、古今集巻第十四恋歌四の素性の歌

「691今こむと言ひし許に長月のありあけの月を待ちいでつる哉」に見られるが、この歌は有明の月が出るまで待ってしまったという表現で、ひとりの夜の時間の経過を表している。和泉式部の歌は、単純にひとりで待っていたが夜が明けてしまったとは言わず、時節は三月のこと、「花」を取り込み、夜中起きて待たされたことを、あたかも桜を心配しているかのような顔をしていたのだと言い贈る。この「思ひがほ」という言葉が効いていて、その実は来るか来ないか一晩中心配していたのにと恨み言を詠んでいるわけである。直截的に詠まず、言い回して訴えるのが特徴的である。

三月晦方に、散り果て方なる枝につけて、人に

798散りにしは見にもや来ると桜花風にもあてで惜しみしものを

歌意は「散ってしまった。もしや見に来てくれるかと桜の花を風にも当てないようにして大事にしていたのに」という率直な心情を表した歌である。ところが、折り取った桜を室内にでも生けて眺めていたのだろうか、その花の散ってしまった枝につけて贈った、ということは、悲嘆の気持ちを表すためだろうか、それとも、花の盛りに便りもない相手への皮肉をこめたのだろうか。この歌は具体的な、歌以上に強く印象づける「散り果て方なる枝」につけて贈ったことで、歌自体に裏の意味は必要はなく、素直な詠み方をしている。

二月ばかり、石山に詣づとて、ある人のもとに

1352心して我はながめんをりをりは思ひおこせよ山の桜を

この歌の上句は、「全釈」「文庫」とも、心をこめて贈った相手のいる都の空をながめると解釈している。石山寺に滞在している、つまり都を離れているわけであり、「ある人」は都にいるという状況は当然である。ただ、「心して」眺めているのは都の空だろうか。たとえば既に見て来た154番（四、連作歌）やこの（五）の項前掲の690番の歌を合わ

せて考えれば、山の桜を眺めて感興を詠むことはあるわけで、この場合も「心してながむ」は山の桜を対象としているのではないだろうか。そして「心をこめて山の桜を眺めています。あなたも時々は思い出してください」に続く「山の桜」は、むろんただ石山に咲く桜だけではなく、自身のことをたとえてもいるのである。

田舎なる人のもとより、三月十余日のほどにいひやる

1253 まづ来んといそぐ事こそかたからめ都の花の折を過ぐすな

詞書の「田舎なる人のもとより」のあとに脱文があると諸注にある。この歌は自身は都におり、地方にいる人に文をやって花の折に都に上ることを促している。急ぐことは難しいでしょうがと言いつつ「折りを過ぐすな」と急がせているのである。脱文のところはあるいは来るといって来ない状況があって文を送ったのかもしれない。

和泉式部は桜の盛りにはだれかと共に賞美したいと思う。しかし、見せたい人はそばにいないので文を贈る。「人」は恋人か、しかし、和泉式部の周辺には男女問わず歌を交わす友達もたくさんいたことが、和泉式部集を通じてわかるので、必ずしも恋人ではないかもしれない。「見にもや来ると」、「思ひおこせよ」「都の花の折を過ぐすな」といった積極的な言葉を詠み込み、桜の美を分かち合いたい相手を誘っているのである。

特に詞書を持たない歌群の中の次のような歌もある。

608 をりよくは見に来ぬまでも我が宿の桜咲きぬと告げましものを

この歌は、独詠か、人に贈ったものかわからない。「をりよくは」という語を直接詠み込んでいる歌は和泉式部以前に見られず、後世もきわめて少ない。「見に来ぬまでも」は『和泉式部日記』に「月を見て荒れたる宿にながむとは見に来ぬまでもたれに告げよと」があり、訪れのない帥の宮へ贈った歌である。

「全釈」は「ちょうどいい機会さへあったら、たとへ見に来てくれないにしても、うちの桜がもうさきましたとあ

のひとにしらせませうものを」と解釈している。

「をりよくは」の「をり」は何の折か。「我が宿の桜咲きぬ」と「告げる」良い機会なのか、そうすると「見に来ぬまでも」は挿入句のようになる。しかし、冒頭にこの用例のない語句を置いて詠んでいることを考えると、この場合は「桜が咲いた折」に機会があれば見に来てほしいという強い気持ちがあり、でも見には来てくれないであろう、それでも我が宿の桜が咲いたことを告げたいということなのではないだろうか。この歌もこれまでも述べているように二句と三句の間で一呼吸おいて言い直している歌である。

これらの歌に共通していることは、桜の折に見に来る人がいない状況で、桜を媒介に人との交流を求めていることである。ただ、求めても得られてない状況でもあり、それも自身でわかっているのである。

このような花の盛りに人の訪れない状況のなかで、和泉式部の心境はどういうものであったか。すでに初期百首の春歌に次のような歌が見られる。この二首は後拾遺集巻第一春上に入集している。

11人も見ぬ宿に桜をうゑたれば花もてやつす身にぞなりぬる

12わが宿の桜はかひもなかりけり主からこそ人も見に来れ

この二首には「花もてやつす身」「主からこそ人も見に来れ」と自らを否定するような響きがある。拾遺集巻第十六1015番の公任の歌で『公任集』の冒頭にある「春来てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿の主なりけれ」は（この花は梅）、詞書に「北白河の山庄に花のおもしろく咲きて侍けるを見に、人〳〵まうで来たりければ」とある。「花こそ宿の主なりけれ」と詠みながらも実は「主」は自分であり、人々がやってくることが嬉しくて喜んでいることが詠みとれる。和泉式部の歌はこれと正反対の歌であり、根底に流れている悲哀が感じられ、わが宿の桜への強い思いはあるものの、それを人が見に来ないことの理由を我が身を卑下することで表現するという、屈折した響きを持つ歌になっ

ている。

これまで見てきた人との関係において詠まれた桜の歌は、このような根底に流れる諦めの意識がありながらも、真意は「桜を見に来てほしい」の表現の歌なのである。

六　まとめ

和泉式部の「桜」の歌は、人に問いかける歌、人を意識している歌でも、実はそこには美しい桜への愛がある。そのような深い思いを表現している詠嘆の歌がいくつか見られる。たとえば次のような歌である。

花のいとおもしろきを見て

1088　あぢきなく春は命の惜しきかな花ぞこの世のほだしなりける

「桜」という後はないが、眼前にある花を見ていて詠んだ歌であることと、「ほだし」となるほどの花はやはり「桜」であろう。春はどうしようもなく命が惜しいと、それは桜があるので、花にひかれて此の世から逃れることができないのだと「命」の代償に思っているのである。それは、次の666番の歌に共通する。

「桜の花の待ち遠なり」といひて

666　暮るる間も知らぬ命にかへつつもおそく桜の花をこそ見め

「おそく桜」は「遅く咲く桜」で、(三)でもふれたように、176番の和泉式部自身の歌以前に見られず後世の用例もわずかである。他に「くるる」「かへつつ」とともに、「おそくさくら」とリズムがあり、歌に軽みを感じさせる。桜という花を「遅く咲く」花と規定する。実際に遅いかに関わらず、早く咲かないか、咲いて欲しいと願う人の心が感じさせる「遅く咲く」桜である。桜への思いを軽妙なリズムに端的に捉えた表現といえよう。

ただ、歌の内容は決して軽いものではない。この「命にかへつつも」「花をこそ見め」とは、「暮れるまでの間をも覚束ないはかない命」の時間と、「なかなか咲かない桜を咲くまで待つ」時間の対比と考えられる。命は刻々と残りの時間を刻んでいく。先を見定め難いのが人の世、あるいはもはや暮れるまでの時間しか残されていないのかもしれない。その見分けがたい残りの時間を、桜が咲くまでの時間に全部使っていいから、桜を見たいというのである。「桜への思い」というものが、「命」と同じレベルに扱われるほどの、儚さとかけがえなさをもつということを表現しているのである。

これまで考察してきたように和泉式部の「桜」の歌は単なる桜への讃歌ではない。むしろ桜を深く愛していても耽溺しきれずにいる、和泉式部にとって桜は、かけがえのないものであると同時にはかないものであり、「人」との絆を重ねている。

また、もう一つの特徴は古今集の「桜」歌群の影響を強く受けていることである。これは古今集の「桜」歌群そのものが美意識の完成度が高く、後世へ大きな力を及ぼしているからであるが、和泉式部は、古今集の意をふまえつつも巧みに応用し、独自に表現を展開している。これは、和泉式部の歌が多く入集している後拾遺集までの「桜」歌の流れの中にあるわけではなく、むしろ直接古今集から独自に引き継いでいる部分が多いことを意味している。

ここで和泉式部の「桜」、「花」のすべてを取り上げたわけではない。ただ、概ね和泉式部の「桜」の歌の本質が窺えるものは示したつもりである。残りの歌については稿を改めて述べたい。

注1　拙稿「『桜』歌の系譜—古今集から後拾遺集へ」（東京女子大学紀要「論集」第六十六巻二号二〇一六）
注2　『源道済集全釈』桑原博史著（風間書房　一九八七）

注3　1に同じ
注4　鈴木宏子氏「『和泉式部百首』覚書―春歌二十首を詠む」（「千葉大学教育学部研究紀要」50　二〇〇二）
注5　『曾禰好忠集』（和歌文学大系54　中古歌仙集（一）　松本真奈美、高橋由記、竹鼻績著　明治書院　二〇〇四）
注6　2に同じ
注7　『屏風歌の研究』田島智子著　（和泉書院　二〇〇七）
注8　近藤みゆき氏「和泉式部と漢詩文」（『古代後期和歌文学の研究』所収）（風間書房　二〇〇五）
注9　久保木寿子氏「和泉式部の詠歌環境―その始発期」（「国文学研究」七十一集　一九八〇　早稲田大学国文学科）
注10　『和泉式部日記　和泉式部集』野村精一校注（新潮日本古典集成（新潮社　一九八一）
注11　『公任集』後藤祥子校注（新日本古典文学大系28平安私家集　岩波書店　一九九四）
注12　『源氏物語1』阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳（新編日本古典文学全集　小学館　一九九四）
注13　『赤染衛門集』武田早苗校注　（和歌文学大系20　明治書院　二〇〇〇）

（東京女子大学大学院博士後期課程人間科学研究科在籍）

キーワード
和泉式部　和泉式部集　古今和歌集　桜